



「無事故365日」へ向けた安全サイクル構築・推進の取組み

NDS株式会社 安全品質管理本部
安全品質管理部長 田中 啓夫

1. はじめに

「安全サイクル」とは、NDS(株)において取り組んでいる「現場で取り組む危険予知・排除活動」を総称して言っております(図1)。

弊社は、平成24年度上期、設備事故、人身事故を連続して発生させてしまっている厳しい状況でした。

また、下期は、NTT西日本様のエリアで高所作業車逸走による重大人身事故が相次いで発生し、もう一度原点に立ち返って安全活動を見直すべき時期でもありました。

安全サイクルの施策は、目新しいものではありませんが小集団ミーティングはすでに平成24年上期から立ち上げていました。2Wayコミュニケーションと指差し呼称の取組みについては、基本・原点に戻って開始しました。

簡単に分かり易い言葉で置き換え「知っているのに、やらなかった・言わなかった・確かめなかった」としました。これをきちっと現場活動で実践できることを安全マネジメントサイクルの中心におく取組みとすることにしました。

過去、指差し呼称などへの取組みをしたことがありましたが、より作業員の主体性を引き出す危険予知・排除活動として定着させるために2Wayコミュニケーションを安全サイクル共通の基盤とし、小集団でのコミュニケーションと現場でのコミュニケーション・確認動作の推進に取り組むこととしました。

具体的な施策の展開にあたっては、現場の工夫や施策実施状況・課題を出し合いながら、基本に立ち戻り、取組みを継続しています。

■基本動作の欠如とは何だろう

いったん、事故を発生させてしまうと「基本動作の欠如」を問われます。

「この基本動作の欠如とは、そもそも何だろう？」を

2. 安全サイクル実施状況と工夫

取組みは、まだまだという状況ですが、取組施策が参考になればと考え紹介させていただきます。

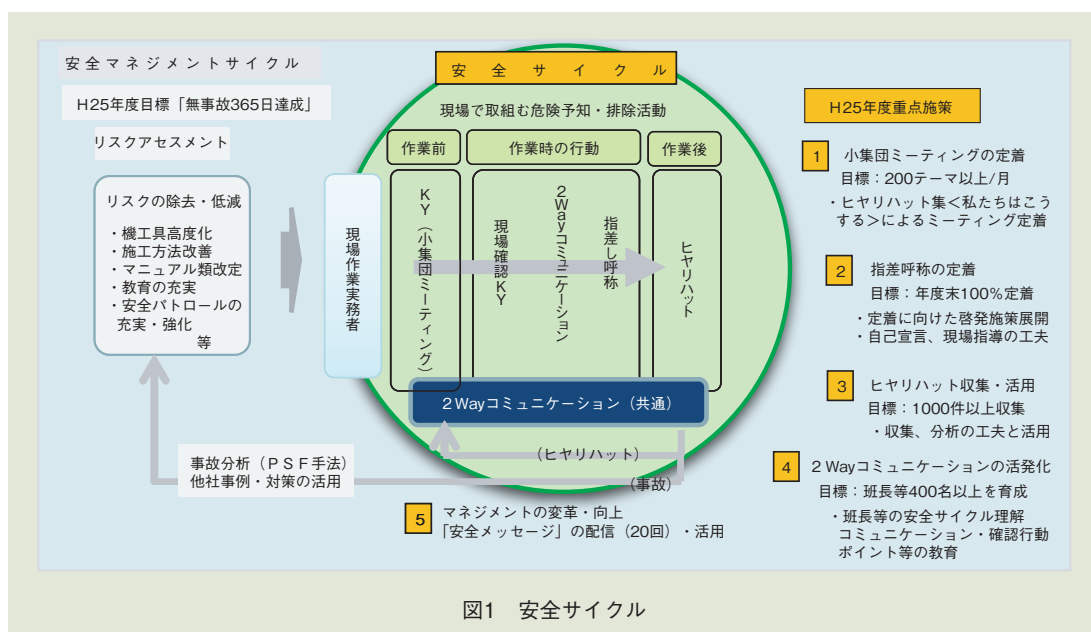
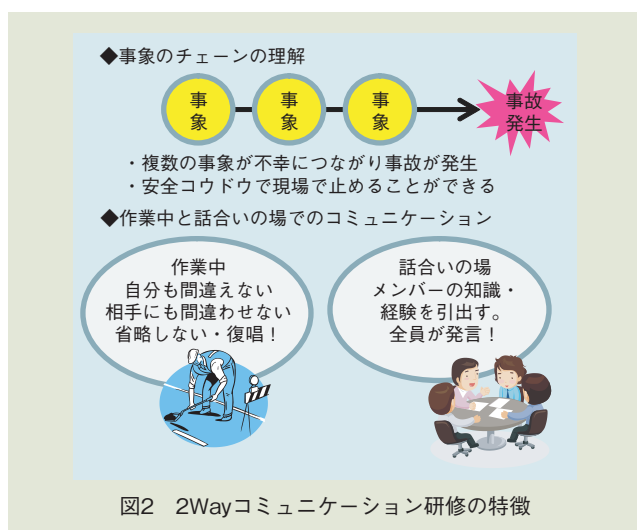


図1 安全サイクル



■ベースとなる2Wayコミュニケーション

安全サイクルの主役は現場の作業員です。安全サイクルを現場で実践し、基本動作の欠如とならないための共通事項として2Wayコミュニケーションの研修を進めてきました。

●2Wayコミュニケーション研修の特徴

(1) 全員の力で事故を止めるためには、事象のチェーン(エラーチェーン)の理解と3つのコウドウ(考動・口動・行動⇒考えること、口を動かすこと、体を動かすこと)を理解することから始めました。

事故は複数の不幸な要因が連鎖して発生するので、私たちが最後の確認、一言かけることをすれば防ぐことができるということを理解してもらい、現場でくい止めることができるというモチベーションを持ってもらうことを狙いとしています。

(2) コミュニケーションポイントを2つのシーンに分けて進めています。

1つ目は、小集団ミーティングにおいて、「よい話合い」を実施してもらうためにミーティング時のリーダーの役割について学んでもらっています。安全教育日は、作業員への周知事項も多く、一方通行になりがちです。メンバーの方全員に発言をしてもらえる進め方を奨励しました。

2つ目は、作業中の「指示・復唱」といった確実な意思伝達のポイントになります(図2)。

また、セミナー名は、<安全コウドウ>というサブタイトルを掲げて、安全サイクル諸施策でコウドウが重要なこと、小集団ミーティングでは<考動・口動>、指差し呼称のポイント<口動・行動>、ヒヤリハットを出すこ



と<口動>などを習得ポイントとして進めています。

これまでの育成実績は、班長等リーダー層を中心に繰り返し実施し、延べ1,000名が受講しました(H25.10月時点)。

3つのコウドウについては、安全大会などでも取り上げ、多くの作業員への浸透を図るため、H25年下期用安全ポスター「3つのコウドウで事故を防ぐ」を作成し、日常、全作業員が意識してコウドウすることが重要であることを忘れてはならないことを訴求しました(図3)。

■ヒヤリハット集による小集団ミーティング

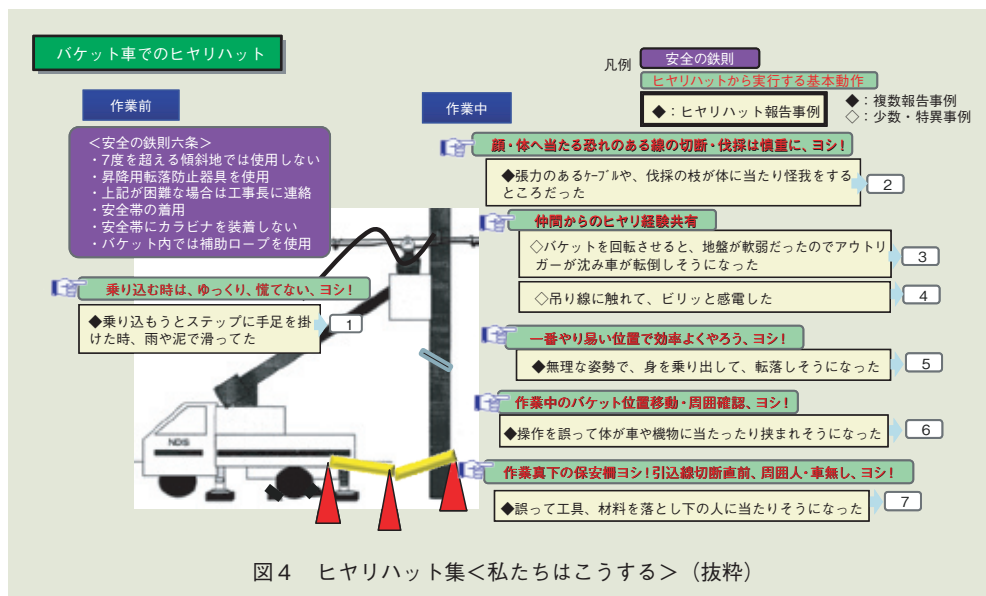
これまでも継続的にヒヤリハットを収集し、社内HPでの掲載、ヒヤリハット集の作成・配布も実施してきましたが活用面に課題もありました。そのため現場での危険予知活動に活用しやすい工夫をしました。

(1) 小集団ミーティングで使うヒヤリハット集<私たちはこうする>を作成しました(図4)。

人身・設備別に作業ごとに分類し、事故がどんな時に発生しているか?ということを作業開始前、作業中、作業後に整理し、簡単なイラストなどを挿入し、発生頻度や確認すべき注意どころに指差マークを入れ現場で活用しやすくなりました。毎月の安全教育において各チームで話合い、対処策を確認し合っています。

(2) ミーティング実施のポイント

ミーティングは2ラウンド法です。現場で短時間でできるようにシンプルな形で進めています。冊子で事例を1つ共有し、全員で出し合い、チームとしてどうするかを決める。という、至って簡単なものにした進め方で



す(図5)。

現在までの活動状況は、「毎月200テーマ以上」という目標で進めてきていますが、おおむね活動も順調に進んできております(図6)。

安全指導者からの報告では、作業員の方も最初は口が重かったようですが、最近は偏った人だけが話すのではなく、メンバーの発言が活発になってきているとのことでした。

3. 指差し呼称は安全サイクルのKPI

安全サイクル施策が、まだまだと記述しましたが、作業員全員が理解・納得する、そして動作としてできるようになること。確認KYの徹底や指差し呼称が安全サイクルのKPIと考え、マネージャーの指導・リーダーが率先して実践することにより、身につくまで「情熱と粘り！」ということを進めています。

具体的な取組みとして、各支店で工夫した施策を含めて紹介します。

(1) 現場KY・指差し呼称実践の啓発施策

まず、全社施策として「私の安全行動宣言カード」(ポケット版)に具体的な実施事項を宣言し、毎月セルフチェックを実施することで動機づけを行いました(H24.12~)。

次に、「指差し呼称ワッペンの装着」(H25.2~)を実施しました。

また、各支店では、「輪止めに指差シール」を貼る、

ワイパーに掲げる「指差し呼称実践中」の赤い旗、「書きき」などの施策をそれぞれ工夫し展開しました(図7)。

(2) 作業員への実践支援・指導

NTT事業本部が、推奨実施ポイントを提示、各支店では朝礼時に動作トレーニングなどを行いました。

また、安全専任者にはパトロール時に対話型指導を実施し、必ず現場KYと指差し呼称の実施状況について対話することをお願いしました。

さらに、定着の定量的把握としてパトロール時に指差し呼称の実施評価をしました。具体的には、各班と遭遇前に遠間で指差し呼称実施を見てもらうこと、遭遇後もキチンと見てもらうようにしました。

定着の定量的把握は難しいことで、すでにバケット上で作業中の場合もあり正確とは言えませんが、現状では上記の把握で、50~60%程度の実施率です。取組み開始時は、10%程度でした。まださらなる定着に向けて取り組んでいるという段階です。

4. ヒヤリハット収集・活用

現場からの情報収集は、例年以上にあります。下期の分析は、ヒヤリ内容に量・質的にどのような変化が現れているのかに着目・分析し、小集団での活用を計画しております(図8)。



図5 小集団ミーティング記録シート（2R法）



図7 指差し呼称定着施策



図8 ヒヤリハット収集状況

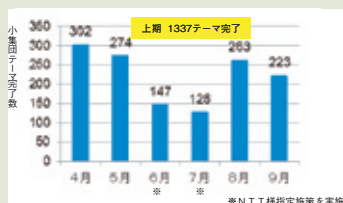


図6 小集団テーマ完了数

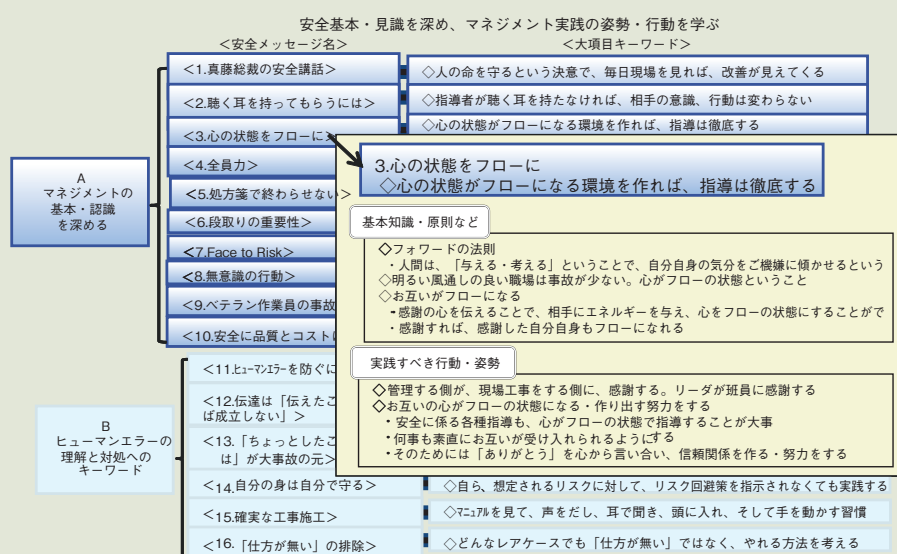


図9 経営幹部・管理職向け安全メッセージ

5. マネジメントサイドの強化

■「安全メッセージ」の配信・活用

経営幹部・管理職への安全マネジメント向上施策は、現在よりもより将来を見据えた取組みが必要です。年に1回、経営幹部を対象とした研修は実施しておりますが、経営幹部・管理職向けに「安全メッセージ」の配信を開始しました（H25. 1～）。

これは、安全品質担当役員から月1～2回配信され、すでに16回実施しました。今後も継続していきます。グループ会社経営幹部会議やマネージャー研修等で活用しております（図9）。

また、新たにマネージャー層を対象とした育成として、安全に関する見識向上・安全施策立案・推進および指導力を発揮することなどを狙いとした「SSV＜安全のスーパーバイザー＞の育成」を1年コースで開始しています。

6. おわりに

安全サイクルのレベルアップやマネジメント面等の多くの課題があると認識しています。取組みの最中、地絡事故を発生させてしまいました。他社様の類似事例を反映しきれなかった反省もあります。今後取組み課題として

(1) 安全サイクルでは

- ①指差し呼称の一層の定着施策
- ②ヒヤリハット分析の工夫・活用
- ③PSF分析、事故事例活用

(2) 人材の育成面では

- ①体感型研修の実施
- ②班長等リーダー層へのフォロー施策
- ③マネージャーの行動力・指導力等強化（SSV育成）

があります。

今後も知恵を出しながら、継続的に安全サイクルを向上させ、事故の撲滅に取り組んでいきたいと思ひます。